

Café des open



三浦一族

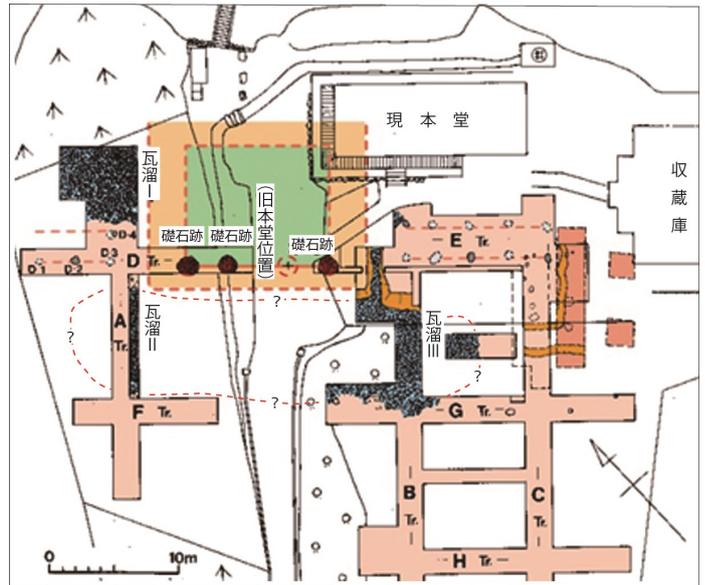
Menu 第9回
岩戸山「満願寺」の
発掘調査と出土瓦

文／中三川 昇（横須賀市教育委員会 生涯学習課）

岩戸1丁目に所在する岩戸山「満願寺」は三浦大介義明末子の佐原義連が寿永3年（1184）に一堂を建立し、平家滅亡後に新たに大伽藍を建立し満願寺と号したと伝わる中世寺院で、運慶一派に関わる仏師による鎌倉時代初期の作とされる国指定重要文化財「木造菩薩立像・木造地藏菩薩立像」や三浦義連墓と伝わる五輪塔などが今も残されています。ただ、「大伽藍」が完成した時期については、貞応3年（1224）義連子息の家連が京都から高僧を招き梵宇（寺院）の供養を実施していることから、この頃ではとの考えが一般的です。

満願寺の境内では昭和48年（1973）に重要文化財の収蔵庫建設に伴う試掘調査、昭和63年（1988）に伽藍整備のための確認調査が行われ、建物礎石や礎石跡、柱穴跡・瓦溜などが確認されました。調査者は柱間三間の中心建物と翼廊の可能性のある附属建物があり、中心建物前面の瓦溜の下部は池であった可能性があると指摘していますが、いずれも部分的な確認であることや、瓦溜の下部は未調査であることなどから、詳細については今後の課題かと思われます。

満願寺の発掘調査では鎌倉時代の瓦が大量に発見されています。出土瓦の大半は鎌倉時代前半期の関東産の瓦でしたが、鎌倉時代初期とされる愛知県名古屋市の「八事裏山窯（やごとうらやまよう）」産瓦も少量出土しました。蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦の組合せで、源頼朝が建立した鎌倉の「永福寺」でも出土し永福寺創建期の瓦「永福寺式軒先瓦」の祖形となった瓦です。永福寺式の軒平瓦は八事裏山窯の軒平瓦をやや簡略化した形状ですが、満願寺の軒平瓦はそれらに一見類似するものの、より繊細な表現で唐草文の外周に圏線と小さな珠文が巡る満願寺独自のもので、組み合う軒丸瓦は巴文です。満願寺最初期の「一堂」の実態は不明ですが、その後徐々に瓦葺の仏堂等を順次建立していったと考えられます。ちなみに総瓦葺の仏堂の存在が確実に想定できる中世寺院は鎌倉とその周辺地域を除くと現在のところ神奈川県内では満願寺が唯一の事例です。満願寺に残る諸仏や中世伽藍遺構、出土瓦などの背景については、まだまだ課題が多く謎めいていますが、佐原氏だけではなく三浦一族全体の複雑な盛衰の歴史が秘められているように感じられます。

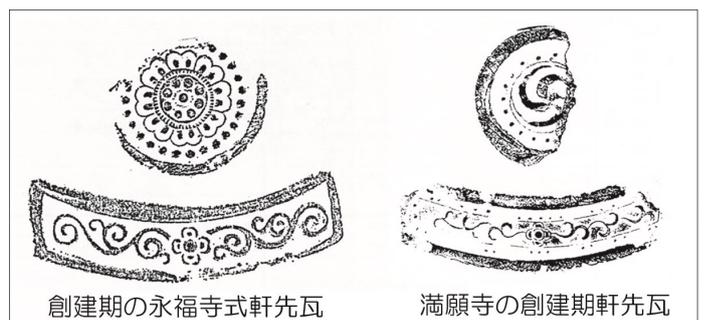


満願寺の遺構配置図（発掘調査報告書の挿図を一部改変）



八事裏山窯産の軒先瓦

満願寺出土の主な創建期軒先瓦



創建期の永福寺式軒先瓦

満願寺の創建期軒先瓦

永福寺と満願寺の創建期軒先瓦